

単純接触効果の生じ方と再認確信度の関係

富田瑛智
森川和則

大阪大学大学院人間科学研究科
大阪大学大学院人間科学研究科

対象と何度も接触することでポジティブな評価を持ってしまふことを単純接触効果とよぶ。単純接触効果の説明理論に知覚的流暢性誤帰属説がある。知覚的流暢性誤帰属説によると、単純接触効果は、対象との接触により知覚的に流暢性になった処理が刺激の評価に誤って帰属されるために生じ、流暢性の誤帰属は対象との接触経験を想起できないときに生じ、接触経験を想起できるときに生じないと考えられてきた。しかし、本研究の結果では、単純接触効果が生じた時、刺激の魅力判断値は、接触経験を想起できたとき高くなっていた。そして、接触経験を想起できるが確信があまりない時に刺激の魅力判断値が最も高くなる傾向にあった。

Keywords: mere exposure effect, recognition, confidence.

問題・目的

単純接触効果は、繰り返し対象を見るだけで、その対象にポジティブな評価を持ってしまふ現象である(Zajonc, 1968)。この単純接触効果には知覚的流暢性誤帰属説という説明理論がある(Bornstein, & D'Agostino, 1992)。知覚的流暢性誤帰属説では、単純接触効果は、対象との接触より高まった対象の処理の流暢性が対象との接触経験に帰属されず、対象に誤帰属されるときに生じるとする。そのため、単純接触効果は接触したにもかかわらず、対象との接触経験が想起できないときに生じ、接触経験を想起できる時には生じないとされる。しかし、接触刺激の再認成績が高い時に単純接触効果が生じるという報告もある(Newell, & Shanks, 2007)。

知覚的流暢性誤帰属説が正しいならば、単純接触効果は、実験時に提示した刺激を正再認(hit)したときよりも、ミス(miss)したときに生じやすくなり、刺激の評価が高くなるはずである。また、刺激との接触によって高まった流暢性は、見たという確信が高くなるにつれて刺激に誤帰属されにくくなるとされる。そのため、見たという確信が高い時に、単純接触効果はより生じにくくなり、刺激の評価は高まらないはずである。それに対して、刺激を見たことがないという確信が高まるにつれて、流暢性は誤帰属されやすくなり、単純接触効果が生じやすくなり、刺激の評価が高まるはずである。

本研究では、顔を刺激として用いて、知覚的流暢性誤帰属説は単純接触効果の説明理論として妥当なのか検討した。検討のため、実験1では、刺激を1000 ms提示し、実験2では刺激を100 ms提示することで、刺激との接触経験の想起のしやすさを変化させた。

実験1

方法

37名の大学生(男性17, 女性20, 平均年齢20.8歳)が実験に参加した。実験刺激は日本人顔24刺激とインド人顔24刺激を用いた。

実験の手続きは接触段階と判断段階からなつた。接触段階では実験参加者は顔刺激の半数(日本人顔12刺激, インド人顔12刺激)を見た。接触段階では各刺激を1000 ms (ISI 500 ms)でランダムな順番に6度ずつ提示した。提示した刺激は参加者間でカウンターバランスした。判断段階は接触段階の4分後と2週間後に行った。判断段階では、実験参加者は刺激を1000 ms見た後、魅力判断と再認確信度判断を行った。魅力判断は9段階(1: まったく魅力的でない~9: とても魅力的である), 再認確信度判断は9段階(-4: 見ていない確信が高い~4: 見た確信が高い)であった。魅力判断, 再認確信度判断は、ともに目盛の下に参考にするラベルを付けたものを提示し、参加者が任意の値を選べる連続的な尺度とした。値はピクセル単位で取得した。

結果と考察

魅力値は、提示刺激の魅力値と非提示刺激の間で、差の傾向は見られた。しかし、提示刺激と非提示刺激の魅力値に差の傾向が見られたのは、直後条件でのみであった($t(36) = 1.77, p < .085$)(図1.a)。そのため、単純接触効果は直後条件で見られた。単純接触効果は、知覚的流暢性誤帰属説によると、見たにもかかわらず見ていないと判断されるときに生じるとされる。しかし、直後条件の魅力値は、提示刺激に対して見た(hit)と判断したときと、見ていない(miss)と判断したときで差がなかった($t(36) = 1.52, n.s.$)(図1.b)。Hit時の魅力値がmiss時の魅力値と差がなかったことは、知覚的流暢性誤帰属説を棄却した。また、再認確信度ごとの魅力値をMann-WhitneyのU検定により比較すると(有意水準はHolm法により調節), 見ていない確信が高い時(-3)に比べ、見た確信が高い時(3)に魅力判断値が高かった(図1.c)。しかし、実験1では刺激が比較的良好に記憶されており($d' = 1.71, SD = 0.59$; Hit率= 0.72, $SD = 0.14$), 接触経験を想起できないという状況が少なかったため、hit判断時の魅力判断値と、miss判断時の魅力判断値に差が見られなかった可能性が示唆された。また、確信度ごとの比較でも、魅力判断値に差が見られなかった可能性が示唆された。そのため、実験2では接触段階での刺激提示時間を100 msに変更した。

実験2

方法

実験参加者は大学生42名(男性14, 女性28, 平均年齢20.3歳)であった。実験刺激は実験1と同じであった。手続きは接触段階の刺激提示時間を100msに変更した以外同じであった。

結果と考察

提示刺激の魅力値と非提示刺激の魅力値に差が見られたのは直後条件のみであった($t(41) = 2.60, p < .013$) (図1.a)。単純接触効果は直後条件でのみ見られた。魅力値はhitしたときのほうがmissしたときよりも高かった($t(41) = 3.167, p < .003$) (図1.b)。そのため、知覚的流暢性誤帰属説は棄却された。再認確信度ごとの魅力値をMann-WhitneyのU検定により比較すると(有意水準はHolm法により調節), 見なかったという確信が強くなるにつれて魅力値は低くなっていった(図1.c)。また, 統計的な差はなかったが, 見たという確信が強くなるにつれて魅力値は低くなる可能性が示唆された。つまり, 再認確信度を横軸とすると, 魅力判断値は, 見たという確信が低いときを頂点にした逆U字関数の形になる可能性が示唆された。実験1に比べ刺激の記憶成績は低かった($d' = 0.78, SD = 0.43, \text{hit率} = 0.53, SD = 0.17$)。

総合考察

知覚的流暢性誤帰属説は, 単純接触効果を説明する理論として妥当であるか検討した。その結果, 知覚的流暢性誤帰属説は支持されなかった。単純接触効果が生じた時には, 刺激の魅力判断値は, 接触経験を意識的に記憶しているときに高くなった。しかし, 魅力判断値が最も高くなったのは, 確信はないが見たと判断されたときであった。

確信はないが見たという判断は, おそらくKnowに近い判断と示唆される。単純接触効果は, このKnow判断によって生じている可能性が示唆された。

本研究の結果は, 単純接触効果は閾下で刺激を提示した場合にも(または刺激の提示時間を短くしたほうが)生じるというBornstein, & D'Agostino(1992)の結果と背反しないと考えられる。閾下や短い刺激提示時間での単純接触効果は, 知覚的流暢性誤帰属説を支持するものであった。しかし, 刺激提示時間の短縮によって, Rememberに近い判断が行えなくなり, Knowのような判断がなされる率が高まったため単純接触効果が生じやすくなった可能性も示唆される。

つまり, 単純接触効果は, 接触経験を想起できないとき, 接触によって生じた流暢性が, 刺激の評価として誤帰属されるために生じるのではなく, 単純接触効果は接触経験を想起できるときに生じる。しかし, その記憶があいまいなほど (Remember判断ができないほど) 単純接触効果は強くなる可能性が示唆された。

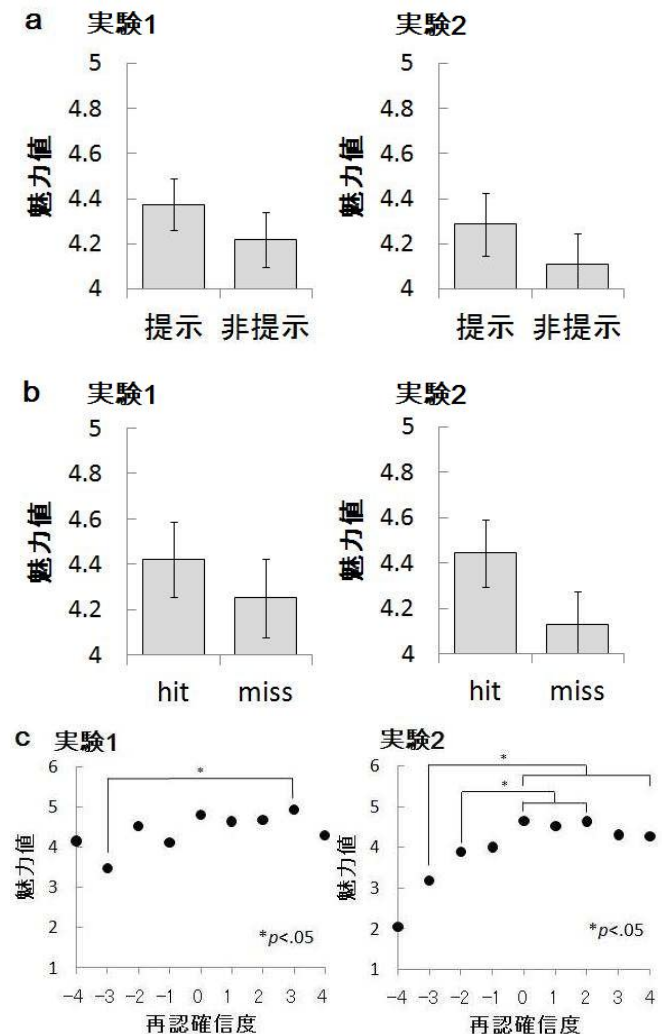


図1 A: 接触段階で提示した刺激の魅力判断値(提示)と提示しなかった刺激(非提示)の平均魅力判断値を示した。B: 接触段階で提示した刺激のうち, 判断段階で見たと判断された(hit)刺激と見なかったと判断された(miss)刺激の平均魅力判断値を示した。C: 判断段階での再認確信度判断の各確信度における魅力値の中央値を示した。エラーバーはすべて標準誤差を示した。

引用文献

- Bornstein, R. F., & D'Agostino, P. R. (1992). Stimulus Recognition and the Mere Exposure Effect. *Journal of personality and Social Psychology*, 63, 545-552.
- Newell, B. R., & Shanks, D. R., (2007). Recognizing what you like: Examining the relation between the mere-exposure effect and recognition. *European Journal of Cognitive Psychology*, 19(1), 13-118.
- Zajonc, R. B., (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 1-27